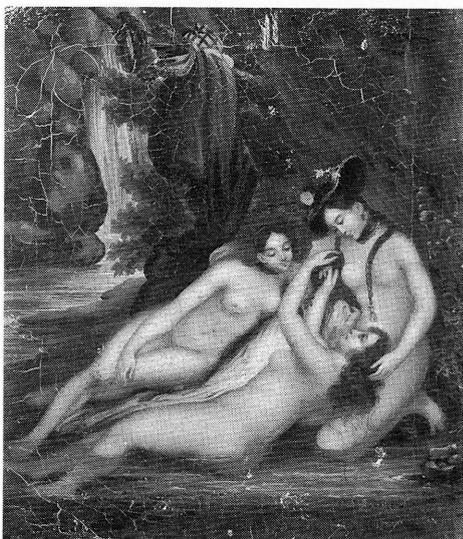




(二) 同 婦人立像



(一) 島霞谷筆 裸婦図



(四) 同 三味線の婦人



(三) 同 扇子とバラを持つ婦人像

## 島霞谷の新資料簡報

島霞谷（文政一〇〇明治三年・一八二七—一八七〇）は近年「発見」された幕末の洋画家である。川上冬崖について学んだ人だが、その没後に妻隆が遺物を群馬県桐生市に運んだまま、誰も手をつけずに一〇〇年以上も忘れ去られていた人である。昭和六〇年になって、隆の使ったカメラや霞谷を撮った鶏卵紙写真が注目され、元治元年（一八六四）写真館を開業した隆は「女性写真家第一号」ということになる。ついで島家に遺存していた鉛活字三八九個は印刷史家に調査され、その没年から出版される医学書数種の奥付にある「東校活版 大学写字生島霞谷発明」が事実であることが證明された。

私は平成二年六月に木下直之氏と桐生を訪ね、五里霧中で新技法・油彩画に挑戦した霞谷の生きざまをありありと感じたことだった。この結果は兵庫近美の「日本美術の十九世紀」展、郡山市美の「油絵百年」展に数点が陳列され、多くの人におどろきの眼で見てもらえて、遺族と喜びを分かちあったのだった。維新戦争、活字の研究ということを思えば、霞谷の油彩画は慶応年間と考えてよい。幕末の日本は想像されているよりはるかに豊かな自立性と開明性をもった社会ではなかったか。

昨年の暮れになって桐生から霞谷の油彩画がまた発見されたと報らせがあり、この一月、私たちは遺族宅で、細く巻かれていたままであったという十数点の油彩画、岩絵具絵、鉛筆と水墨のデッサン下絵類に直面した。ここにその少しばかりを紹介しよう。

(一)水浴図 木綿に油彩(303×252mm)。日本人の描いた裸婦像としては最も早い例で（裸婦像が公然と描かれるようになったのは明治も最晩年である）、巻かれてあったのに亀裂はあるが剥落は全くない。画面左の滝とそれに続く水面の動きや奥行は稚拙で充分にはとらえられていないが顔面や水中の肉身表現は、僅かに残されている幕末明治初期の日本人作家のなかでは抜群の技術的達成がみえる。舶載された手彩色の銅版画か石版画を手本にしたと思われる。

(二)婦人立像 膠を引いた紙に油彩(357×268mm)。未完成であることによって当時の描き手順が解る貴重な例。レースのショールには細い筆が巧みにつかわれている。肌や顔面の色彩が鮮やかに残っている。

(三)扇子とバラを持つ婦人像 ドウサ引きの麻布に油彩(507×399mm)。遠景の林と山はどこに起源をもつものであろうか。多くのヴァリエーションが残されている。典型的な表情と体型は幕末に一般的な表現。外国を意識した「大日本霞谷写真」のサインは多くのことを考えさせられる。

(四)三味線の婦人 絹に水彩(535×397mm)。霞谷は弁慶縞がカーブする衣皺を描くのが好きだったようである。

(五)その他 カンバスに油彩で即写した蛇の図や多くの鉛筆デッサンなどが調査を待っている。